せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42－2590
第133号・平成12年10月1日

年表で読む 古平の歴史

《40》

■本州は内地では北海道は？

今はあまり聞かれなくなりましたが、北海道の人たちの多くは本州のことを内地と言っていました。四国・九州などはそのままの地名なのに、どうして本州だけが内地と呼ばれてきたのでしょう。

内地という言葉の反対は外地ということで、もともと自分の国の領地ではなかったという意味です。これまでアイヌの人たちだけが住んでいたところへ、当時、和人と呼ばれていた日本人が移り住んだということが、本州を内地と呼んできた理由でもあります。

北海道・千島の一部はもともと日本固有の領土で、その後の歴史の中で日本の領土となった千島の一部・樺太・台湾・朝鮮などが外地なのです。

戦後、外地引揚者という言葉が盛んに使われましたが、それまでは内地＝外地という意味での使われ方は一般にはなかったようでした。

早くから、本州を内地という呼び方は誤解を招くとして、明治六年五月、開拓使はまず公文書の上で北海道を北地・他府県を内地と呼称することを廃止しました。しかし、習慣として多くの人が永い間使い続けていたということです。

■蝦夷地の重要性

明治の新政府になってもまだ戦いが続き、榎本武揚の率いる旧幕府軍と箱館付近で交戦していて国内の情勢が不安定でしたが、蝦夷地開拓は大きな問題として注目されていました。

五百円札の肖像になった後の右大臣・岩倉具視は、当時の蝦夷地の開拓について次のような意見を述べています。

「日本の国力を高めるには蝦夷地の開拓が第一で、そのためにも※夷という字は良くない。まず開拓には旧幕府の降伏人や流罪人などで開拓に当たらせ、その後、一般人を説得して内地から移住させる。開拓は漁業・農業に力をいれ、なお機械などを使えば、後には必ず一大繁盛の地となる。」

しかし開拓の方法となると、意見は大きく二つに分かれました。

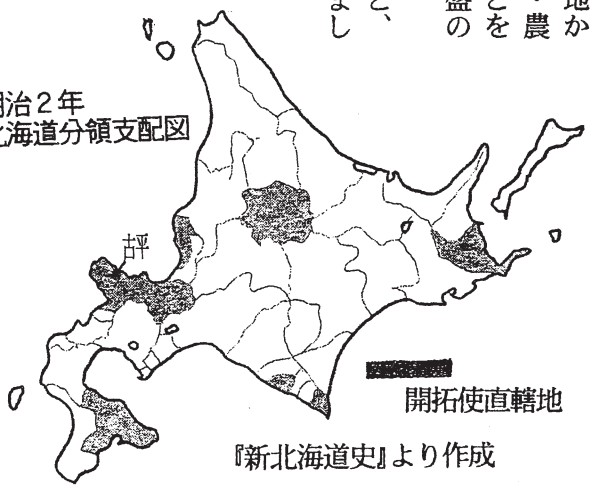
■北海道を分けて開拓

北海道の開拓には政府が直接当たることが最善なのですが、まだ新政府の基盤が弱く、国内のあらゆる整備に要する費用が莫大であり、政府は北海道開拓使という役所は設置したものの、無一文から出発した新政府にとって北海道開拓は難題でした。

それで政府としては藩と一体になって、北海道の開拓という国家的な大事業を進めるという考え方から、分領支配という形をとることになりました。

※夷（えみし）＝蝦夷と同じ意味だが、古代に奥羽から北海道にかけて住み、狩猟生活をしていた人たちの差別用語でもある。明治二年、蝦夷地を北海道と改称する。（松浦武四郎の命名）

明治２年
北海道分領支配図



『新北海道史』より作成

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を偲ぶ

【34】

大正六年

12／8　今年のリンゴ作は一番の上作で、千五百円の売上げがあった、良い品種を新しく植えたので、六、七年後には二千円ぐらいになるだろう。二時頃、本陣の川で新式のガソリンポンプの試験があり見に行く、なかなか性能の良いものだ。古英丸が七日振りに入港する。

12／11　古平座で浪花節があるので聞きに行く、二十人程の入りで、なかなか上手だったが、新地の方で評判が悪かったので今日の入りが少なかったとのこと。

12／19　昨日からの雨風が続いて大時化だ、波が道路まで上がっている、伊之君は売り出しの品物を調べている。

12／24　永い荒れもようやく静かになり、古英丸が来る。夜になり雪が降り出して、寝るころには一尺も積もっていた。

12／26　時化でカレ網も出られなかったが、今日は三百貫ぐらいずつとれて、浜はにわかに活気づいてきた。

12／27　タラ漁も良く、カレ網も三百～四百貫とれるので景気が良い。

12／30　時化が続いていたが、タラ、カレ網は出漁した。掛け金もボツボツ入金があり、一般に景気も悪くはないようだ。

大正七年

1／1　例年、元旦は吹雪か寒さが厳しいのに、今年は雪が不足で天気も良い、暖かい正月であった。年始の回礼が全廃されたので全く歩く人がない。十一時、学校へ行き交礼会に参列する、金杯で祝杯を挙げ、本年の万福を祈る、二時ごろ帰る。夜は明日からの売り出しの支度をするが、福引きの商品が無いので閉口する。

1／2　一番客は美国から来た加我さんという人で、網その他で六十余円を売る、遠いところからの珍客で、本年の商売も幸先が良い。その後も切れ間なく客があり忙しい、合計千百六拾円余りの売り上げだ。昨年より四百円も多い。

1／4　注文の網類を馬車で配達する。銀行では本年の初取り引きということで手ぬぐいと手帳をくれる。

1／7　快晴でカレ網が出たが吹雪になり、途中から戻って来た、二日に出漁したきりで毎日の時化とはひどいことだ。伊之君が二十五歳の厄年になったので、三山神社の大川さんに来てもらって祈祷をする。十一時から農会の役員会が役場であるので行く、技術員を雇うかどうかについて協議する。綿糸が暴騰している。

1／10　毎日毎日よく荒れることだ、二日からカレ網は出ていない、漁がよかったのにこれだと不漁だ。余市通いも止まったままだ。店のカレンダーもまだ着かない。夜、原田さん宅で甲寅会の決算調べをする。

1／11　今日は帳祝いの日なので、帳面を飾って、めでたく本年も商売繁盛することを祈る。

1／18　寒さが厳しく、天候もまだなおらない。カレ網は少々無理して漁に出たようだ。沖には五百トン～六百トンぐらいの汽船四隻が避難している。

1／19　古平座へ歌舞伎芝居が来たが吹雪で入りが悪いようだ、『曽我の対面』と『野ざらし吾助』であった。

1／20　十時から信用組合の総会が学校であった、茶菓が出て午後一時に終わる。

1／21　昨日からの雪は近年稀な大雪だ、積丹の野塚では雪でつぶれた家があったとのこと、天気もようやく晴れてカレ網が出漁した、タラは出られなかった、昨年の十二月からナギの日が四日ぐらいのもの、こんなことも珍しい。

―― 以下次号 ――

北海道・樺太・千島を探険
最上徳内 蝦夷草紙 を読んでみましょう

鯡猟（にしんりょう）を占う

松前では節分にまく炒り豆をとっておいて、正月十五日の夜になると、囲炉裏（いろり）の火に近い灰の上にその豆を輪のように並べ、豆一粒一粒に村落の名を言いながら待つと、ついに豆に火がつく。その焼け具合を見ると黒く炭になったもの、灰の白いものなどがあり、その村落の鯡猟の豊凶を占うのです。

ここ松前では鯡猟がすべてなので、このようなことにも関心を寄せるのです。鯡猟の船や櫂（かい）は他国（藩）の鍬（くわ）・鋤（すき）と同じで、猟場は田地と同じです。それで田畑を開墾したり、植林や薬草の栽培などしようと勧めても、誰もそのような話に乗って来る者はいません。また、このようなことに容易に金を貸そうという者はないが、鯡猟をするといえば金銭は借り易い。領内では百姓といってもみんなが猟（漁）師のようなもので、耕作で生計を立てている者はまずいません。

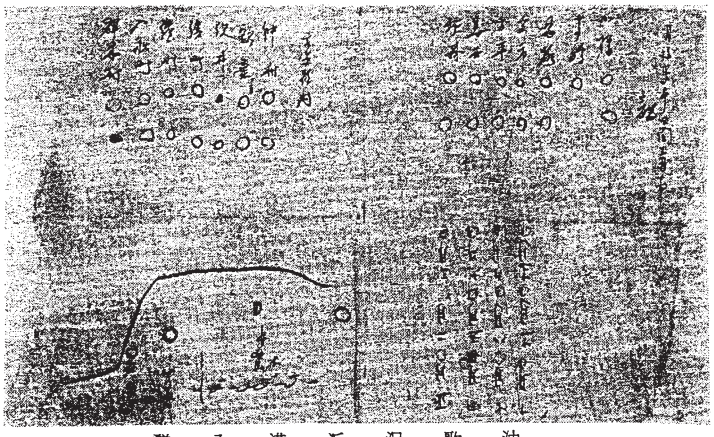
【注】鯡猟（鰊漁）＝鰊は松前西部や西蝦夷地（日本海沿岸）で多量に漁獲されて、東蝦夷地では西蝦夷地に比べると少ないが、それでもその土地の重要な産物でした。毎年、福山・江差地方の住民は、鰊漁期になると老幼男女に至るまで競って鰊漁に従事し、わずか二、三十日で多額の収入を得、自家の食料として蓄えるほか、武士・百姓の区別なくこれを製造して販売し、これで一年の生計を立てているのです。従って鰊が不漁のときは、たちまちにして松前地方に恐慌が起こるといわれるほどでした。しかし、その漁獲はただ鰊の大群が来るのを待つだけで、人力が及ぶものでないことから、そこにいろいろなしきたりが生まれました。

豆占いは、東北地方でその年の農作物の豊凶を占ったものでしたが、松前ではそれが鰊の豊凶を占う習慣として取り入れられたようです。

このほか漁期中は種々の禁忌（きんき＝してはならないこと・忌みきらわれること）があってとても厳重でした。たとえば「鹿は角あるもの、鰯はこまもの、鱒は夏もの、蛇はながいもの、狐はいなり、熊は山の人・山のおやじなどといい、この禁忌を犯し者は腰に縄をかけて引き回されたり、或は海に投げ込まれて、塩辛い目にあわされます。これを免れるには酒を買って来て大勢に飲ませたり、砂に頭をすりつけて詫びをするしかありません。」

鰊漁には占いのほかに、神仏への祈祷も盛んに行われていました。

――続く――



〈古平でも行われていた豆占い
群来村・相内吉蔵漁場〉

古平郡内	沖村	歌棄村	沢江村	浜町	港町	入船町	群来村
	○	○	●	○	○	○	●
	○	○	○	○	○	○	○

名医・池田先生の思い出①

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

『せたかむい』の四月号に、常連投稿者のお一人である橘義春さんが「わが闘病日記」を載せられ、その中で

「ペースメーカーの装てん手術をなされたのが、心臓外科で有名な池田教授でした」

と書いてありました。

「まさか、私がお世話になった池田晃治先生では」

と思いながら読み続けたのですが、次第に

「間違いなくあの池田先生だ」

と確信するようになりました。

それは、橘さんにペースメーカーを装てんされた池田先生が

・吉平町や稲倉石を知っていた

・心臓外科で有名な先生で、杏林大学病院にお勤め。

・平成十一年に定年退官。

というお方との事でした。

一方、私がお世話になった池田先生は

・私が、稲倉石鉱山で勤労・厚生を担当し、直営診療所を掌轄していた当時、札幌医大胸部外科（部長さんは和田壽郎教授でした）より若手の新進医師を派遣して頂いていたのですが、昭和三十八年の春に一か月に満たない短期間でしたが「池田晃治先生」が赴任されました。稲倉石を存じておられるのは、その時の思い出ではないでしょうか。

・昭和四十三年の八月に、札幌医大・胸部外科で日本初の心臓移植手術が行われ、新聞やテレビなどで大々的に報道されましたが、池田先生も、主要メンバーとして参加されました。

先生が三十六才の時でした。

・昭和四十四年に、私が転勤で稲倉石を離れ、翌四十五年には鉱山が売山されました。

以来、お世話になった札幌医大の先生方の消息も途絶えてしまいました。

ところが、お別れしてから三十年も経た平成二年の事。偶然にも池田先生の消息を知ったのです。

それは、社会保険法規研究会が、企画制作し、医学各界の第一人者が執筆された『新版・家庭医学大全集』を手にした私は驚きと懐かしさを覚えました。

執筆者の中に「杏林大学胸部外科・池田晃治教授」のお名前があったのです。

同姓同名の別人ではと思いましたが、胸部外科の専門医ならば、鉱山でお世話になった池田先生に違いないと心に決めておりました。

更に、平成九年に富山の地元新聞（北日本新聞）に池田先生に係る記事が載せられ、年齢が六十五才となっておりましたから、私（当時六十七才）より少し若かったという印象とも符合しますし、平成十一年に病院を定年退官されたという事も符合します。

×　×　×

橘さんの「池田さん」と私の「池田さん」は同一人だと確信した私は、未知の橘さんに、若い頃の池田先生の写真を添えてお便りを送りました。

橘さんの住所は「せたかむい」主筆の、村井芳男さんにお聞きしました。

さて、その結果は？

鉱夫さん健康を守った
稲倉石診療所

荷車

竹内コト

子どものころの思い出のひとつに、荷車のことがあります。

明治生まれの父が、この荷車を引いて働いていた姿が目に浮かびます。いつも番屋の入口の脇に置いてあって、漁の後の荷を積んだり、漁場で使う薪（まき）や木炭、また米俵なども運んでいました。畑の時期になると、大量の大根やいもを倉庫に運びますが頑丈で、重い荷車を引くのは重労働だったようです。

砂利道も大変でしたが、道路の大きい凸凹（でこぼこ）や、雨上がりのぬかるみは荷車泣かせでした。沢江の浜通りなどは玉石がごろごろしていて、歩くのにも石をよけて歩かなければならないのに、荷を積んだ荷車では「ゆるくないだろうなァ」と、見る度に思ったものでした。

高学年になって父の荷車について行くことがありましたが、荷車の後押しをして手伝ったこともありました。そんなとき、父は黒ずんだ手ぬぐいで汗を拭きながら、「コト、どうもどうも…」と言います。

漁場では、身欠、数の子、胴鰊、鰊の笹目など、干し上がったものを俵やかますに入れて倉庫まで運びますが、そのときも荷車が使われます。

どんなに疲れたときも、「なァに、寝て起きたらなおる。」と言って、毎日のように力いっぱい働き続けた父も、八十一歳で亡くなりました。

今はもう荷車なんか見ることもありませんが、子どもたちを励ましてくれた、荷車を引く父の姿と重なって当時のことを思い出します。

仏像探訪

室谷忠雄

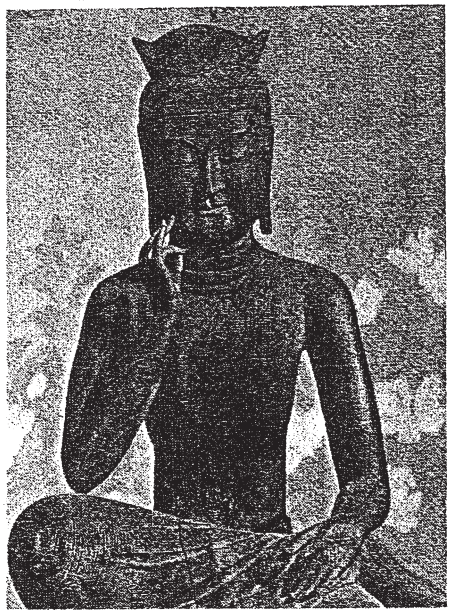
（4）

一般に飛鳥時代（あすかじだい＝七～八世紀）の仏像は、西洋風の顔形をしているものが多かったのですが、全く違う顔形をした仏像もあります。それが国宝の『弥勒菩薩半跏思惟像』（みろくぼさつはんかしゆいぞう）で宝冠弥勒ともいわれる写真の仏像です。

純東洋風の気高い顔形をしていますが、その美しさで有名な木彫仏です。この弥勒像は赤松の一本作りで、頬づえをつく右手まで本体と同じ一本の木で彫られているのです。

残念ながらこの弥勒像の作者はわかっていませんが、韓国に残されているこれとよく似た弥勒像と比較してみると、その洗練された繊細で柔和な表現などから、日本で作られたと考えるのが妥当であろうといわれています。実際にこれ以後、西洋風の仏像はほとんど世に現れていません。つまり飛鳥時代には、現在の韓国などから多くの仏師が渡来していたことが考えられます。

この仏像には"思惟"（しいしゆい）ということばがついていますが、これは自らが遠い将来、如来になったときに、いかにして衆生を済度しょうかと思案している姿をいうのだそうです。



国宝《弥勒菩薩半跏像》
――京都・広隆寺――

断章小説【ふるさと遥か】第15編

生死の狭間で

吉川義雄

台湾・基隆(キールン)港。湾口の崖が両側から迫る狭い水路を通り、巡洋艦鹿島が疲れた足取りで湾の奥深く入って行った。

鹿児島を出港以来、主人を護る猟犬のように活躍してきた駆逐艦梅と桃も、鹿島の前後を、今も変らぬ忠実な姿で進んで行った。

この一週間、彼らは戦いづくめであった。沖縄周辺の海中にはどれだけの潜水艦が潜んでいるのか、時には左右から魚雷が突き進んで来た。連日、艦内に戦闘ラッパが響き渡り、応戦の爆雷が黒潮の中で炸裂して、高々と白い水柱を何本も海面に突きあげた。

鹿島に便乗して、ここまでたどり着いた友野兵長は、下艦と同時にどっと疲れが押し寄せてきた。休む間もなく移動準備をしていた彼の許に、どこをどうして運ばれて来たのか、故郷の妹からの封書が届けられた。

航空隊に所属している恩恵とは思うが、連携の綿密さに驚かされた。しかし、彼の喜びはすぐ消えた。文面をむさぼり読んでいくうちに、彼の目から涙があふれ落ち、果ては懸命にこらえる悲痛が、嗚咽(おえつ)となって彼の口からもれ出した。

「…兄さん、驚ろくことと思いますが、お母ちゃんに替わって私が悲しい知らせを書くことになりました。当分知らせるなと言われても、便りが途切れたらかえって心配させると思ったからです。

実は、五郎ちゃんが海に落ちて死にました。兄さんがあれれほど可愛がっていたのに、今はいません。四十五日も過ぎました。…」

悲しみを耐えて書いた妹の文面からも、今の彼同様、嗚咽がもれていた。末弟の五郎は、彼が出征するとき四歳であった。妹に抱かれて伯父の漁船に乗り、定期船上の彼を追いかけながら、何事か分からないままに日の丸を振り続けていた。

濃緑の山々が囲む港は静かで美しかった。海と山の青さの中に今もその日の丸が鮮やかにはためき、故郷から遥かに遠く離れたんだと彼は改めて思った。

弟の訃報は、以後も友野を苦しめ続けたが、戦争の過酷さはいつまでも感傷に浸ることを許さなかった。昨日まで、否、さっきまで談笑し合っていた友が、いくら叫んでも帰らぬ人となっていった。

友野も、何人かの部下や親友を失った。靖国の杜で合おうと、豪快さを装って特攻出撃した者もいたし、さっきまで靴下の繕いをしていた兵が、グラマンの夜襲であっけなく死んだ。

フィリピンのクラーク飛行場に先行した仲間が全滅し、荷重で輸送機が降ろされた友野と数人の仲間が生き残った。死と隣り合わせはいつでも同じことだろうが、余りにも周囲で死が重なると、人の感情は厳粛な死にも慢性になるのか、涙も出なくなるようだ。友野の心も、形相さえ索漠として生きる意味など探ろうともしなくなった。どうでもいいのでる。

そんなとき、友野は忘れかけていた妹からの手紙を取り出して読んだ。

「…兄さん、五郎ちゃんが息を引きとるとき、『あんちゃん』と言いました。まちがいなくそう言いました。兄さんの身代わりになったのでしょうか、兄さんはゼッタイ死なないで下さい。五郎ちゃんはキット兄さんのところに行っていると思います。…」

「俺の身代わりなんかいらんッ、俺は必ず帰る」

忘れかけた人間らしい涙が友野の頬を伝った。

＜この稿　終わり＞

遥かなる故郷の思い出

わが闘病日記

[70]

橘　義　春

癌（ガン）――続き――

三年前、ガン予防の補助食品『ぷろぼりす』を、駅の近くにたくさんある薬のディスカウントスーパーを探し歩いたら、あるワ、あるワ価格も手頃のものから高いものまで、なぜ同じメーカーの製品が店によってこうも売値に大きな差があるのか、不思議でたまらない。製品も錠剤のものあり、カプセル入りのものあり、水溶性のもの、ロイヤルゼリー入りのものど、種類が豊富で、各店をまわり、その中で価格の一番安い店で錠剤を選んだ。それが縁で約三年間同じ店に通い、それを飲み続けている。

7月25日（金）
午前、血糖値検査90

午後、CT検査（頭部）
主治医桂先生がまわって来て、私の大腸の手術が31日（木）に決まったとの知らせがあり、「手術はレザーメスを使用しますが、橘さんの場合、心臓にペースメーカーを埋め込んであるので、埋め込み手術をされた池田先生のご意見を聞いた上でレザーメスを使うか、普通のメスを使うかを決めたいと思います。」と、言って帰られた。

夕方、跡見教授が訪ねて来られ、大腸の内視鏡検査のフィルムを見てビックリしたようだ。「橘さんの大腸の腫瘍はタチ（質）が悪いんだよなァ。」と、言われた。

タチが悪いということは、悪性の腫瘍だということだ。つま

※（次ページ上段へ続く）

たのしく　ペンを持ちたい

渡　辺　ハ　ツ　エ

私の書きつづったものが『せたかむい』に載って、早いもので六年の歳月が過ぎました。

北海タイムスの《女性の窓》に掲載された、「大火の思い出」という一文を紹介していただいたのが初めでした。

夫が健在だった頃には、いろいろと郷土・古平の昔話を聞かせてもらい、それらを参考にして拙い文章をつづってきましたが、今、それらを読み返して見て恥じ入っております。

私には古平を語るような才覚もなく、この頃は、遠くに住む孫たちの成長の喜びを随想として書いてきて、それは私なりに一つの喜びでした。

知り合いの方と道で逢ったりすると、「『せたかむい』読んでいますよ。永く続けて楽しませてね。」と声を掛けられることがあります。

先日も、電話のベルが鳴って急いで受話器をとると、聞き慣れた元気な女性の声で、

「九月号の『せたかむい』にあなたのが載ってなかったので、もしかして体の具合でも悪くて書けないでいるのでは、と思って心配になって電話したの。」

と、いうことでした。

私は即、「元気でおります。先月はちょっと都合があって書けませんでした。ご心配かけてすみません。また頑張って、これからも書きますからね。」

電話の主は遠藤さんのお母さんでした。毎月、川柳を書いておられる石井愛子さんのお姉さんです。現在は札幌に在住されていて、親同士が友人でした。

「遠藤さんの母さん、これから寒くなります。くれぐれも身体に気をつけて元気でいて下さいね。私も、母さんにも喜んでもらえるように頑張ります。ありがとうございました。」

※（前ページより続く）
り悪性のガンだということを、それとなく私に告知されたものと理解したが、私自身もガンだと思っていたのでそれほど驚かなかった。いよいよ来るものが来たナ、という感じであった。

跡見先生が帰られたら、同室の患者で、大学出のパチンコの釘師という変わり種がすぐ私のベットへ飛んで来た。

「橘さん、跡見先生を前から知っていたんですか」

「いや、先生と話をしたのは今回で二度目です。なぜ？」

「橘さんが親しそうに話をしているので、前から先生を知っているのかと思っていました」

「跡見先生って、どんな先生なんですか？」

「橘さんは知らなかったんですか。あの先生は昭和天皇が手術のときに執刀をされて、新聞やテレビにも出た有名な先生ですよ。」

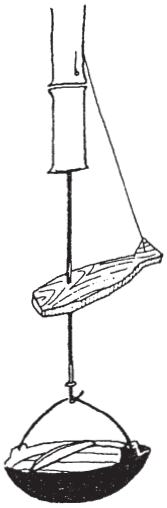
あの昭和天皇のおなかを手術された跡見教授が、今度は私のおなかを切る。昔だったら考えられないことだ。

パチンコの釘師の話では、この跡見先生の名声を慕って全国から患者がやって来て、入院の順番待ちをしているそうだ。してみると私は、くろだ先生の紹介で入院できて幸運だった。

―続く―

俳句　古平ホトトギス会

裏山の梅野山荘木の実落つ　斉藤波留
スナックの歌声もるゝ夜ながかな　山口悦子
蝉時雨短き命燃やしけり　越野敏雄
古平に根差す越後の盆踊り　大和田絵伊
まっすぐに客にあらざる鬼蜻蜓　福井幸平
割れスイカ匂いに群るゝすずめ蜂　関口勝志
先々の車窓切れざる蝉時雨　よしざきり
間をおいて試し鳴きするキリギリス　仲谷比呂古
島沖に群れなすかもめ磯遊　越野清治
風もはや身にしみわたる今日の朝　室谷弘子

柳

八十路坂盆のおどりに身が動く　石井愛子
亡き友と笑い転げた里の宿
盆おどり月も笑って合の手を